

ソフトウェアのチャンク提示法による速読訓練の効果

神田明延（首都大学東京）
湯舟英一（東洋大学）
田淵龍二（ミント音声教育研究所）
鈴木 政浩（西武文理大学）

キーワード： 読解効率、 提示方法、 学習ソフトウェア、 チャンク

1. はじめに～これまでの研究背景

本研究グループは、3年ほど前より特定ソフトウェアを使い、チャンク区切りをした英文の提示方法を工夫することにより読解効率を高め、速読能力の向上を図ってきた。その成果はすでに過去2年間の全国研究大会において発表してきた。使用したソフトウェア（「プレーヤー・ミント」開発者：田淵龍二、特許第3549195号）は英文をチャンク区切りで表示し、また読み上げ音声と同期することで、速度を調整して、速読訓練ができる。しかもここで重視したチャンク区切りの提示方法を変えられる。これまで主に検証してきた提示方法の種類としては、1）空白に英文チャンクが順次現れる、2）空白に英文チャンクが現れては、消える、3）全文表示された状態から英文チャンクが順次消えていく、である。その内、2）が学習者にストレスはかかるものの、有意に速読能力向上を示す読解効率を高められた（神田他2007）。

2. 研究方法

2.1 処遇環境

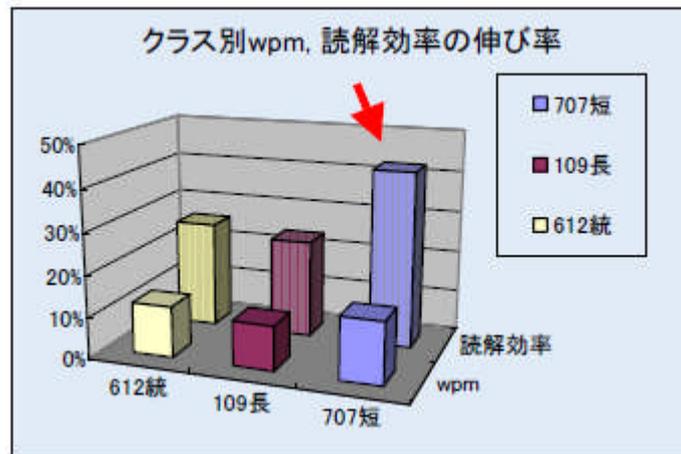
速読訓練を行なった環境について説明する。処遇を行ったのは首都大学東京1年次一般基礎教育科目である「実践英語I」の複数クラスである。ここでは全クラスが統一教科書を使用し、統一テスト、能力別クラス編成などにより、クラス内の均整が保たれ、学習における教員や教材による差異が少ない。そこで、1.で効果が見込まれる（湯舟他2007）成績下位クラスから統制群1、実験群2の3クラスで実験を実施した。

2.2 処遇方法

提示法ごとに実験群と統制群を組み複数教員によって速読訓練をプレテスト、ポストテストも含め、実施してきた。その訓練とは、半期12～13回の各授業において、開始時のウォームアップとして5分程度、上記ソフトウェアを用いて今回は提示方法は上記「2）英文が現れては消える」で、チャンク長を変えた同一の英文を実験群ごとで読ませ、直後に読解内容理解問題を解かせた。これらの訓練を短時間でも毎回取り組ませることで、チャンクを意識した速読を心がけ、読解問題があることで読解効率向上を図った。

3. 結果考察

図 1



プレ・ポストテストの結果では、短いチャンク(7~8 words程度)の実験群(707 クラス)が読解効率において最も有意な伸び率を顕著に示した。このように、短い時間の処遇訓練であっても、習慣化することにより読解効率を高める速読訓練は、ソ

フトウェア上で有効であることが分かった。

たださらに、図を見るなら、いずれのクラスも伸びていることは確かで、特に統制群612においては109より高い。これには707と109・612における教員が違っており、それぞれの指導の違いが影響したと考えられる。特に612では研究分担者である長谷川宏司(首都大学東京)によるチャンク読みと密接に関連しそうな独自の音読訓練も為されており、その影響も考えられる。それはまた今後の音読訓練の導入という課題が残されたとも言える。

いずれにせよ、この成果は今日様々な e-Learning の速読教材が氾濫する中で、効果的な英文提示方法を提案しているものと確信する。

<本研究は平成21年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)の補助による>

参考文献

神田明延、湯舟英一、田淵龍二 (2007). 個別学習と連携したソフトウェアによる速読訓練 『第47回 LET 全国研究大会発表要項』, -.

湯舟英一、神田明延、田淵龍二(2007). CALL教材における英文チャンク提示法の違いが読解効率に与える効果 *Language Education & Technology* 第44号、pp.215-228.